

家庭内摩擦と社会的役割の中の女性のアイデンティティー —— 桐野夏生『OUT』が映し出す彼女たちの不安 ——

武内 佳代

1997年刊行の桐野夏生氏の『OUT』は、弁当工場のパートタイマーの「主婦」たちによる夫殺害の隠蔽を主軸にした小説である。本シンポジウムでは、ベロッチィ氏の「小説は社会学の本よりも鋭く現実社会を表現する」という提言に端を発し、『OUT』が映し出す、現代日本人女性たちが直面する様々な困難を中心に議論がなされた。

桐野氏によれば、『OUT』創作の背景には、近所の「主婦」たちが家事・育児などをこなしながら、なおかつパートタイムに従事している、という驚くべき事実を世間に知らしめたい、という強い思いがあったそうだ。だが、ほとんどの男性読者は、「主婦」たちによる夫殺害の方ばかりを焦点化し、この作品を批判的に捉えたという。このことに遺憾の意を示した桐野氏が、それ以上に悲痛の表情を際立たせたのは、『OUT』以後の「主婦」の犯罪増加に言及して、「主婦」たちの無意識世界の不安を作品が彼女たちに向かって顕在化させてしまったのではないか、という危惧を口にされたときだ。「小説が現代社会を表現する」というとき、その「表現」は、〈現状〉ばかりではなく現代社会の〈これから〉を先取る可能性をも含意するのはいうまでもない。小説は良かれ悪しかれ人生のケース・モデルを読者に提供し、ときにそれが犯罪を引き起こすこともある。その悲痛な表情からは、桐野氏がこのことに極めて自覚的であることが窺われ、また、現代を描く作家としての真摯な思いを垣間見た気がした。私にとっ

て、最も印象的な瞬間だった。

ところで、ベロッチィ氏によると、近年イタリアでは、高学歴の新社会人は男性よりも女性のほうが多いそうだ。しかし、女性たちの多くが男性並のキャリアを得られない実情があるのだという。氏は、現代イタリア社会の女性に対する偏見の根深さについて、大人ばかりではなく、すでに子どもに、固定した父/母の性別役割分業が刷り込まれていることにその要因を指摘した。これについて桐野氏は、現在の日本も同じような状況にあると述べ、また、女性の約半分が非正規雇用で働く現在においては、女性の自活に貧困までもが伴うことを強調した。そして、男女問わず若年層にも及ぶこの傾向が、『OUT』のときには想像すらできなかった社会の悲惨さであることを伝えた。確かに、いまや正規雇用からの‘OUT’ side という問題の深刻さは、「主婦」だけに限られたことではあるまい。若年層の引き籠もりやニートの問題も含めれば、この‘OUT’の意味合いは、さらなる複雑さを帯びるだろう。

本シンポジウムでは、ほかにも、『OUT』における男/女の表象分析、桐野・ベロッチィ両氏の執筆活動の詳細、日伊における「女性作家」の意味合いなど、フロアーからの質問も吸収しながら、非常に多岐にわたる豊かな対話がなされた。そのすべてを紹介できないのはとても残念だが、最後に、フロアーが同時通訳の不自由を忘れ、みな終始熱心に耳を傾けていたことを、ここにお伝えしておきたい。

たけうち かよ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻